

## 奇声が紡ぐ歴史、あるいは「狂人」が照らす真実

橋本栄莉

イイイアアアア——アッアッ、…ンゲンデン、ウオ、イエエエエエ——

これは私が研究している予言の歌の一節である<sup>(1)</sup>。

アフリカで予言の研究をしています！などと言えば、日本に暮らす大抵の人は笑うか、首をかしげるだろう。世界は解決すべき問題であふれている。なのにあなたはなぜ、多額の金銭を使い、命を危険にさらして、予言者なる人物のマジナイ的発言に耳を傾けているのか。あなたは頭がオカシイのではないか。こう人に思われ、実際に言われ、自分でも実は少々怪しんでいる。

私が二〇〇九年からフィールドワークを行ってきたのは、南スーダン共和国に暮らすヌエル(Nuer)と呼ばれる人々である。日本では南スーダンは内戦や貧困で知られ、その地に暮らす人々は「かわいそう」な人々としてイメージされる。そんな彼らが百年前の予言を信じているなどといえば、やっぱり彼らは「まだ」そんなことを信じている、科学的思考のできない「かわいそう」な人々だと思ふ人もいる

奇声が紡ぐ歴史、あるいは「狂人」が照らす真実（橋本）

だろう。

一方、私の専門である文化・社会人類学では、南スーダンが人類文化の宝庫として知られ、ヌエルといえはその名を知らぬものはいない「レジエント」だ。ウシへの強烈な執着、ウシのやりとりによって成立する婚姻、死者との結婚、性交渉をめぐる厳しい掟、一神教でもアニミズムでもない「一にして多」である神々……。そこは私たちの「常識」を大きく揺さぶり、人類の無限の可能性について思考するのに及びつたりの場所なのである。

では、彼らは本当に「かわいそう」なのだろうか？そして予言者や私は頭がオカシイのだろうか？だとしたら、この世界における我々の存在意義とは？

\*

冒頭の「予言」を残したのは、一八三〇年代頃に「不妊の女性」から生まれたとされるングンデン・ボンという名の人物である。名前の最初に「ン」がつく時点で、我々にとっては異質な存在であることをほのめかしているかのようだ。ここで「予言者」と訳したのは、ヌエル語でゴックと呼ばれる人々のことである。ゴックとは、直訳すると「皮袋」を意味する。

通常人間の体の中に詰まっているのは、血肉であり、臓物であり、「私自身の」意思である。しかし、時としてその中身が異なると思われる人間が生まれることがある。ゴックとは、その中身が、クウオスという神的存在で満たされている皮袋である。しかしその人物は、生まれただけではゴックになれない。

クウォスが詰まっていることを証明する奇跡を起こして初めて、人々にそれと認識される。逆にクウォスが詰まっていないと周囲の人間に判断されれば、その人物は単なる普通なる人間であり、その奇異な言動から時として「狂人」と呼ばれる。

ングンデン・ボンは、一八六〇年頃から奇妙な言動をするようになる。動物の糞や人糞を食べて過ごす、肛門にウシの杭を突き刺しながら座る、何日もブツブツ言ってブッシュをさまよい、灰以外のすべての食べ物を拒む……。彼はこのような言動から、生前は単なる「狂人」として社会から疎外されていたという。しかし、彼の死後、人々を襲った数々の出来事は、実はングンデンが生前に奇妙な歌や言動の中で示していた、つまり予言していたのではないかと言われるようになった。

彼による予言の多くは、歌というかたちで残されている。その歌の多くの部分を占めるのは、金切り声とも咆哮ともつかない冒頭にあげたような「奇声」である。歌には部分的にはいくらかの単語が入ってくるが、その単語をつなげて作る文章の意味は不明である。ングンデンの死後、この世に取り残された人々は、歌に含まれる単語やフレーズ、彼の奇行に自らの不幸を重ね合わせ、自らの経験を予言されたものとして語り直している。それは単に一民族集団内の口頭伝承にとどまらず、民族集団を超え、世代を超え、時には国家情勢をも左右することになった。二〇一一年、人々はングンデンの予言を口々に語り、国家の分離独立へと一票を投じたのだった。

かつての「狂人」の声は、人間の一生や日々の暮らしという小さな歴史から、国家の行方という大きな歴史までも説明する一種のコードとして参照されるまでになった。彼の歌は、戦時にはラジオで流れ、キリスト教と接合され、近年では携帯電話の着信メロディーとなり、今や動画配信サイトで世界に配信

奇声が紡ぐ歴史、あるいは「狂人」が照らす真実（橋本）

されている。ングンデンの予言は、アフリカの閉ざされた伝統文化として沈殿しているのではなく、世界の変化と連動し、時代の要請に対応しつつ、大小さまざまな規模の歴史を紡いでいる。

\*

ングンデンは生前「狂人」と罵られていたが、人文科学において、「狂人」は結構重要な意味を持っている。少し文脈は異なるが、フーコーは人間に「真実をもたらす」という「狂人」の効果について次のように語る。

（人びとが）狂人を認知すると必ずそこに自分を認知することができるようになり、自分の中に、同じ声・同じ力・同じ特異な光が生れてくるようになる。「…」狂人は人間の基礎的な真理を明らかに出す。つまり、その心理は人間を、もともと原初的な欲望や、単純な機構や、身体的最も切実な諸規定などに還元する。「…」「狂人は」狂気を体験しない原始人の自然から人間をへだてるすべての事態、それらが人間をどこへ追いやってしまうことができたか、を示している。狂気は文明およびその不快感とつねに結びついている。<sup>③</sup>

「狂人」を見るということは、自分自身の対極と思われる場所、すなわち経験世界の果てを見ることになる。この引用の中でフーコーが示しているのは、「狂人」を見つめる側、つまり狂っていないと思

われる側のグロテスクなまなざしである。私たちがある人物を「狂人」とみなすとき、その前提となっているのは「狂っていない」自分の存在である。「狂人」の存在は問う。お前たちは真に「正常」であるのか、と。

ヌエルの人たちが災禍に見舞われて気が付いたのは、過去のングンデンの「狂人」ぶりこそが真実で、それを笑ったり蔑んだりしていた自分たちこそが無知で「狂った」人間だったということである。ングンデンは、当然のものとして受け入れられている現実や日常は、クウオスの吐息一つで吹き飛んでしまう大変脆いものであることをその言動の中で示していた。人々は、自分自身の真実の居場所を「狂人」の中に再び発見したのである。

\*

ところで、世界の果てにおいて自分自身の姿を再発見する・させるという「狂人」の仕事は、どこかフィールドワーカーの営みとシンクロする。文化人類学のフィールドワークの特徴は、外から対象を観察するのではなく、当該社会の人々の間に埋没しながら、自身の主観や感情と徹底的に向き合いながら、他者と対話することにある。調査データを書き込むはずの私のフィールドノートは、人の悪口と体調不良、泣きたい帰りたいという叫びでいっぱいだ。

奇声が紡ぐ歴史、あるいは「狂人」が照らす真実（橋本）

「もう、「ヌエルの」女の人たちいやだ！…今日みたいに、出発するついでに洗濯とかしようとする、ギョッてなる（怒りマーク）。すごく聞かれるのが、『おまえは「ムル」「女性器のこと」を持っているのか？』って。「女」だから「井戸まで」水汲みに行けってこと？単にからかわれるだけ？…付き合ってらんないよ！…生理について聞いてみた。まあ、爆笑されただけだった。」

（二〇一一年三月二二日のフィールドノートより、「」内筆者補足）

私はこんなフィールドワークが得意でないし好きでもないのだが、それでもこの作業が自分にとって必要なのは、自分自身を「やり直す」ためである。自分自身を「やり直す」のに手取り早いのが、自分にとって他者であるような人々の中に飛び込むことである。時として、それは狂気が必要とする。ちなみにこの断片フィールドノートは、四年後、ヌエルにおいて女性器とは生物学的器官ではなく極めて社会的な器官であるという指摘につながる。

神話や予言の世界にとらわれているようにみえる人々は「かわいそう」だと見なされるかもしれない。しかし、その中で生きていると、「役に立たねば価値がない」というマジナイ的圧力の中で生き、そうとは知らずに他者を憐れむ我々もなかなか「かわいそう」に映ることがある。もちろん、世の中の役に立つことはひじょうに貴いことである。一方で、真に「役に立つ」とはどのようなことを問わず、「役に立たねば…」というマジナイばかりを唱えて自分を苦しめている人もいるようだ。

\*

人間にとつての眞実とは、どこか絶対的な場所に不変的なものとしてあるのではなく、それを希求する人間と、あらゆるジャンルの〈現実〉との対話の中に見出される。あらゆるジャンルの〈現実〉——それは、遠い過去の神話や古文書であったり、科学的統計や生物学的事実であったりする。あるいは、死への不安、個人的な記憶、目の前の人のすぐれぬ表情、肉親への気遣い、見知らぬ誰かのネット上でのつぶやき、散らばった離乳食の配置、満員電車で過ごす技法、ほどよいサンマの焼き加減……時として生々しい〈現実〉との対話の中で、日々、我々なりの眞実は見出されている。

この、我々が生きていくために必要な我々なりの眞実は、必ずしも今の世の中で言われている「役に立つこと」と一致しない。価値のあるものと価値のないものとがどこかの誰かによって「予言」され、それをついつい信じがちな我々が、いつか（あるいはすでに）脆い現実に直面した時、頼りにするのはどの「理性」だろうか。「狂人」は合わせ鏡のように、それを見つめる人間たちが信じる仮の「理性」を映し出す。人間とは、人生とはこうあらねばならない、という諸々のマジナイがはびこる今、その現実の陰に隠れているものを照らす「狂人」にも、まだまだ仕事が残されている気がする。こう考えると、頭がオカシイと言われる人間の存在にも、一分の「理」が認められるのではないだろうか。

奇声が紡ぐ歴史、あるいは「狂人」が照らす真実（橋本）

註

- (1) ングンデンの予言に関しては以下を参照。橋本栄莉『エ・クウオス——南スーダン、ヌエル社会における予言と受難の民族誌』（九州大学出版会、二〇一八年）。
- (2) 詳しくは、「ヌエル三部作」と名高いエドワード・エヴァン・エヴァンズ・プリチャードの以下の民族誌を参照。「向井元子訳」『ヌアー族』（平凡社、一九九七年）、「長嶋信弘・向井元子訳」『ヌアー族の親族と結婚』（岩波書店、一九八五年）、「向井元子訳」『ヌアー族の宗教（上）（下）』（平凡社、一九九五年）。
- (3) ミツシエル・フーヨー「田村俣訳」『狂気の歴史』（新潮社、一九七五年）、五四〇—五四一頁。「」内は引用者による省略と補足。

（本学文学部准教授）